

Cantatas for the Fifth Sunday after Trinity

三位一体節後第 5 主日のカンタータ

この日曜日のライブツィッシ・カンタータ 2 作のうち、早い方の BWV93 でのバッハの処方は、彼が明らかに愛好していたその日のための讃美歌のひとつ、ゲオルク・ノイマルクの「**Wer nun den lieben Gott lässt walten**」(1641)の歌詞と旋律の両方を基に作品全体を構成することだった。(因みにブラームスがドイツレクイエム作曲の際に愛好したのもこれ。) この曲は彼の第 2 サイクルに属し、冒頭のコラール・ファンタジアは適度に洗練されたものだが、バッハとしては自分の幼少期のルーツにまで掘り下げしていたようで、それは単にこの讃美歌を慈しんでというのではなく、ふたつの楽章(No.2 と 5)を自分もずっとそうして学んだ教義問答形式で構成した点でもそうだ。そこでバッハはノイマルクの讃美歌の 1 節を取り出して、それを 1 行ずつ宣言して行く:「どんな思い煩いも何の役に立つ?」、「悲しんだり嘆いたりして何が良い?」とそこにソリストが必ず軽く装飾を付ける。すると自由なレチタティーヴォが返事の言葉でそれを遮る:「果てしない恐れと苦痛と、言い表せない苦惱で、心を押し潰すだけ」等々と中世の進句のように。つまりノイマルクのコラールをバッハが自由に処理していることに常に注意もしくは精通していないと、それらを変化・装飾・短縮・繰り返しさせるバッハの驚くべき手法 - すべては表現上説得力に富む結末のため - に追従できなくなるということだ。

オープニングのファンタジアでは、4 声の独唱者(*concertisten*)が先導して装飾を加えた全 6 行の讃美歌バージョンをペアになって歌い、その後の「手際」は合唱全員によるブロックコードのハーモニーに渡され、そこで低声部が装飾的対位旋律を煽る。シンメトリーに構成されたこの作品の中心楽章(No.4)では、讃美歌が元のままの形で、中世のミサ典書の金色頭文字のように浮き上がる。それを言葉を付けずに届けるのがユニゾンのヴァイオリンとヴィオラで、それに対してソプラノとアルトの装飾では叙情的に凝縮された曲となる。ふたつのアリアでは変装はさらに微細なものとなる。言い換えをしても再登場は弦楽伴奏のテナー・アリア(No.3)だ。このエレガントなパスピエのステップがなぜ 2 小節ごとに休止するのだろうかと思ったら、やがてテナーが「しばらく、じっとそのまま」(*Man halte nur ein wenig stille*) - そして神のお告げを聞きなさい、とその訳を明かしてくれる。最後のアリア「*Ich will auf den Herren schauen*」(No.6)にもさらにギャグが潜んでいて、ソプラノとオーボエの楽しい掛け合いではこのカンタータとしてはここで初めてコラール不在の場に来たと我々は悟る。そして「彼はまことの奇跡を起こす方」(*Er ist der rechte Wundermann*)と歌うと、加工なしで讃美歌の響きが入る。こうした機知や駄洒落という不品行はバッハを初めて聴く人々には賞味されたのだろうか、それとも無駄骨だったか?